

◎子どもたちの教育環境とそその変化への対応

① 子どもたちの今～青少年基本調査より～

■渋谷和生

1 はじめに

市民局青少年企画課では、横浜市の青少年の意識や行動の実態を調査し、青少年行政の基礎資料を得るため、「平成十年度横浜市青少年基本調査」を実施した。

この調査は横浜市内の小・中・高校生約三千人を対象に各学校を通して調査依頼したもので、回収率は一〇〇%であった。なお、五年前の平成五年度にもほぼ同様の調査を実施しており、そのとき得られた小・中・高校生の意識等との比較も含め、調査結果の概要について報告する。

2 普段の生活と家族との関係・家庭生活

① 学校生活の楽しさ

小学生、中学生ともに八割以上の者が学校は「楽しい」「まあ楽しい」と答えており、この傾向は前回と変化はない。

この調査結果を家族との会話の頻度に関する質問とクロス集計すると、家族と「よく話をする」と答えた小・中学生は、学校を「とても楽しい」とする割合が多い。

一方、家族と「ほとんど話をしない」者は、「学校へ行く気がしない」とする割合が小・中・高校生ともに高く、この点からも家族とのコミュニケーションが子どもたちの生活にとって大きな影響を与えていることが推察される。(図-1、2、3)

② 多忙な放課後の過ごし方

小学生のうち八一・七%が学習塾・お稽古

ごと等に通っており、このうちの五五・四%が週三日以上の日数を通っている。また、中学生については六二・〇%、高校生は三三・〇%が学習塾等にかよっている。

家族との会話と「学校へ行く気がしない」のクロス集計

図-1

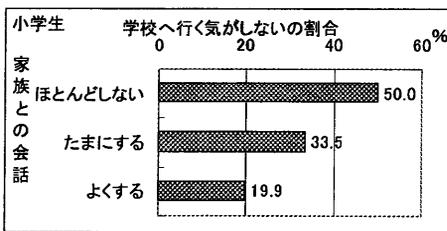


図-2

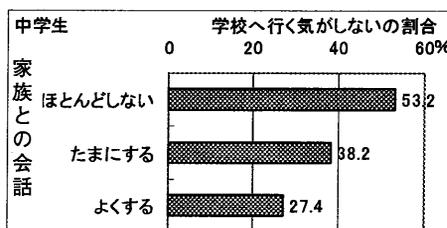
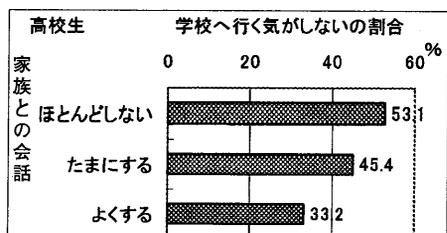


図-3



① 子どもたちの今～青少年基本調査より～
 ② データで見る学校教育
 ③ 変わる教育観と「ゆめはま教育プラン」へま
 ち～とともに歩む学校づくり

1 はじめに
 2 普段の生活と家族との関係・家庭生活
 3 友人関係
 4 心身の状態や悩みこと
 5 地域での活動
 6 規範意識等
 7 性別役割に関する意識
 8 人生観、価値観
 9 まとめ

部活動については中学生七〇・〇%、高校生六四・三%であり、日数についても週三回以上がいずれも八割以上を占めている。彼らの生活の中で塾や部活動の占める割合がかなり高いことがうかがわれる。

こうした忙しい時間を縫いながらの遊び場所は、小・中学生では友人の家や公園など、高校生では「街をぶらついたりショッピング」、「カラオケ」などが多くなり、最近、街でよく見かける高校生の姿がアンケート結果にも正確に反映している感がある。(図-4、5、6)

また、小学生、中学生とも半数以上が「遊ぶ時間」について「足りない」「少し足りない」としており、遊ぶ時間に関しては、やや欲求不満を感じている様子が見受けられる。

3 友人関係

① 友人の数

小学生、中学生、高校生ともに「同性」の友人の数を「五人以上いる」と答えた割合は約八割に達し、その中でも「十一人以上」と答えた者が相当数いる。

この数字を見る限り、かなり活発な交友関係を持っているようである。

② 友人からの評価

このような中で、自分が友人からどのように思われているかについての質問(複数回答)には小学生、中学生とも「明るい子」が最も多く、他に「運動が得意な子」「勉強が得意な子」「親切な子」などに多数の回答が寄せ

られている。

4 心身の状態や悩みごと

① 心身の状態

子ども達が日常生活の中で感じている心身の不調や悩みごとについてたずねた。

心身の状態については、「疲れやすい」「学校に行く気がしない」「頭痛・腹痛」等が多くなっており、小学生から高校生へと年齢が進むにつれて全体的な割合が高くなる傾向にある。また、五年前の調査と比較しても「疲れやすい」「何となくさびしい」が増えており、今回の調査からは子ども達の活発さがやや衰えているように感じられる。(図-7)

② 日常生活の悩み

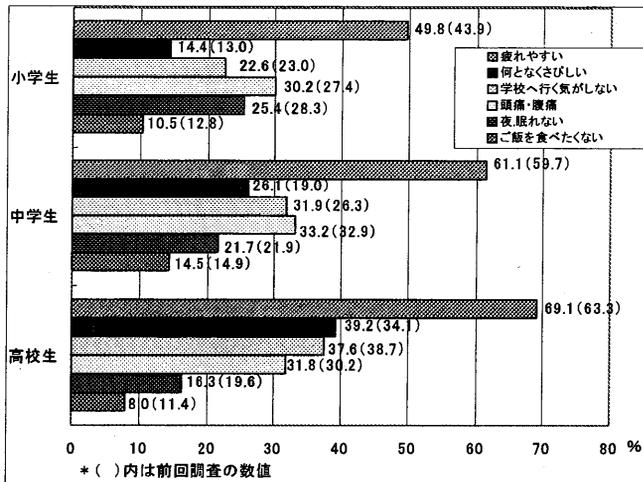
日常生活の悩み(「よくある」+「時々ある」)は小・中・高校生とも「学校の勉強がわからなくなる」ことがある」が最も多い。また、「進学・進路」についての悩みも中学生、高校生ではかなりの高率を示している。先述のように学校生活は楽しんでいるが、一方で勉強や進路については悩みを抱えている子ども達の姿が浮き彫りにされている。

(図-8)

③ 食生活など生活習慣等との関係

「疲れやすい」「夜、眠れない」「学校へ行く気がしない」「何となくさびしい」等という心身の不調を訴える割合と朝食の摂取状

図-7 心身の状態



放課後の自宅以外の遊び場所(複数回答)

図-4 (小学生)

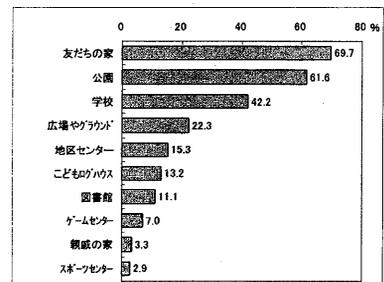


図-5 (中学生)

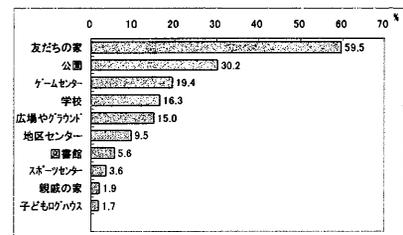


図-8 悩みごと(よくある+時々ある)の割合

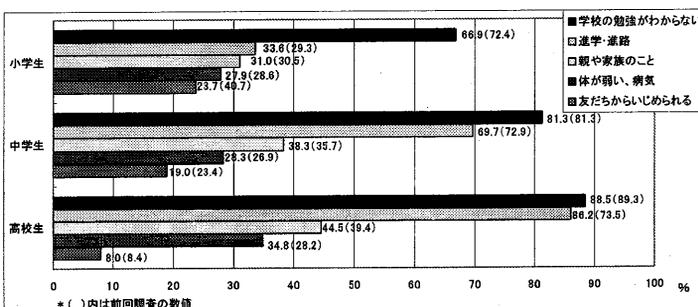
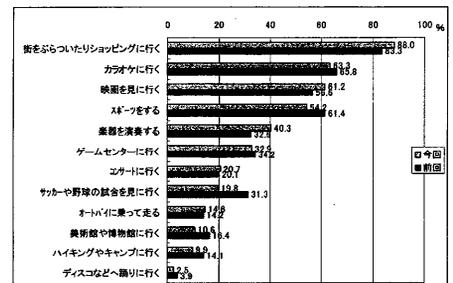


図-6 学校以外での過ごし方(よくする+時々)の割合(高校生)



況、就寝時間などの生活習慣、家族との会話の状況をクロス集計すると、そこには次のような関係が見られた。

全般的傾向として、「朝食をほとんど食べない」「午前〇時以降に就寝する」「家族と会話をほとんどしない」とした子どもにも心身の不調を訴える割合が高くなっており、生活習慣や家族のコミュニケーションが子どもの心身の状況に影響を及ぼしているものと思われる。

また、家族との会話の頻度については、子ども自身の自己評価にも影響を及ぼしており、家族とほとんど話をしないと答えた者は自分を「とても不幸せである」「少し不幸せである」とする割合が高くなっている。(小学生、中学生)

なお、朝食の状況については、五年前の調査と比較すると小学生、中学生、高校生とも「毎日食べる」と答えた割合が増えており、このことについては一応好ましい結果と受け止めている。

5 地域での活動

地域社会における人間関係の希薄化や少子・高齢化による地域での活動の担い手の減少が言われて久しいが、子ども達は地域の活動についてどのような意識を持っているのか。

今まで参加したところのある地域での活動についてたずねてみたところ(複数回答)、高校生では「地域の行事」「スポーツ活動」「公園などの清掃、ゴミ拾い」などが多く挙げられている。

一方、今後参加したい活動については、「スポーツ活動」「地域の行事」の他、「外国人との交流」「子ども達の指導や世話」「高齢者施設での手伝い」などといった多様な分野への希望もかなりみられる。

高校生、大学生など比較的高年齢の青少年が、地域での活動に不活発であるというような声を聞くこともあるが、参加志向に合った効果的なメニューの組み合わせによっては活動により多くの青少年を呼び込んでいくことも可能と考えられる。

6 規範意識等

① 規範意識の薄れ

小学生、中学生、高校生になるにつれ、学校や社会で「してはいけない」とされていることへの逸脱の許容度(「してもよい」「少しならしてもよい」とする割合)が増してくる傾向にある。

また、この五年間の変化としては中学生、高校生において「学校をさぼること」への許容度が大きく増えている。

「してもよい」と考えることがすぐさま実際の行動につながっているとは即断できないが、「学校をさぼること」以外の項目では小学生で「万引きをする」ことへの抵抗感が薄まりつつあることが目立つ。(図-9)

② 高校生に定着した「髪を染める」「ピアスをする」

「髪を染めること」には八七・五%、「ピアスをする」には八四・〇%の高校生が

「してもよい」または「少しならしてもよい」と答えている。これは五年前の調査結果であるそれぞれ五五・九%、六四・八%より大きく増加している。このことについても、結果がただちに行動に結びつくとは限らないが、いわゆる「茶髪」や「ピアス」についての抵抗感はほとんどなくなりつつあると思われる。

7 性別役割に関する意識

中学生、高校生に対して「結婚したら、家事や育児は女性がすべきである」「女の子は男の子より控えめな方がよい」ということについてどう思うか質問した。

全体的には、女子より男子の方が「家事や育児は女性がすべき」「女の子は控えめな方がよい」という意見が多くなっている。性別役割に関する男女の意識差が依然として存在していることがうかがわれる。

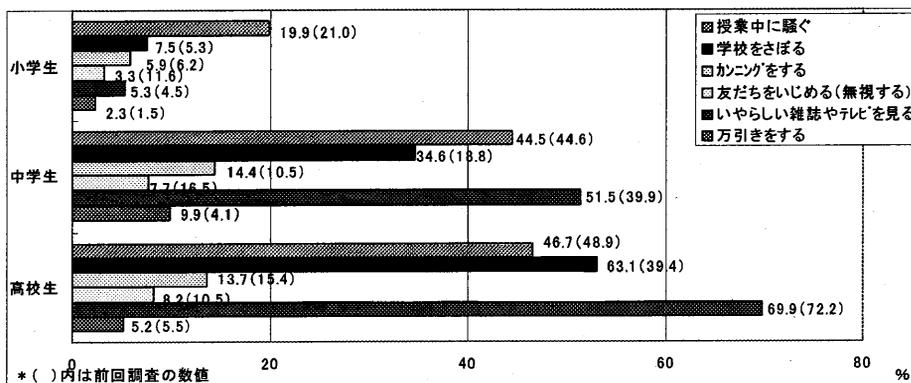
しかし、前回の調査結果と比較してみると「家事、育児は女性」「女の子は控えめな方がよい」について中学・高校生、男女とも「そう思う」「どちらかといえばそう思う」とする割合が減っており、特に男子においてその傾向が顕著である。

結果を見る限り、性別役割に関する男女の意識差は存在するものの、この五年間でその差はかなりなくなってきたものと思われる。

(次頁図-10、11)

8 人生観、価値観

図-9 学校や社会のきまりに対する「してもよい/少しならしてもよい」の割合



「人生において重要なこと」について高校生にたずねたところ、八割以上が「自分のしたいことをやりとげる」ことが非常に重要であると答えている。一方で、「将来お金持ちになること」「将来高い地位につくこと」は重要視されておらず、個人の自己実現を重視するといわれる現在の高校生の人生観をよく反映した結果となった。

「次代を担う青少年について考える有識者会議」（平成十年四月）が指摘したように、自由や個性を尊重されて育ち、個人の自己実現を重視する現在の青少年の中からは、オリンピックなどの大舞台でもプレッシャーに負けることなくむしろ楽しみながら素晴らしい成果をあげるなど、従来とは異なったタイプが出現してきている。

また、多様な情報機器を使いこなし、大人が考えつかなかったような用途を発見したり、そこから得た情報を活用して自らの可能性を広げている者もいる。

このようなプラス面がある一方、「平成十年度版青少年白書」では今日の青少年の生活と意識について「忍耐力がない、我慢ができない」「自分の感情をうまくコントロールできない」「自己中心的である」「社会道徳、規範意識（モラル）に欠けている」などのマイナス面を青少年自身が意識していることを述べており、問題行動の背景をなすものの一環として指摘している。

このような考え方をを持った青少年に対し、彼らの持つ可能性をいかにして引き出してい

くか、一方で自らが社会の一員であることを認識させ、守るべきルールは遵守し、他人への思いやりを持つようどう導いていくかが今後の課題であると言えよう。

そのために重要な役割を果たすのは、「家庭でのしつけ」とともに、社会の一員としての意識などを青少年が自らの体験を通して感じ取っていくための「経験の場」の提供と思われる。「5」地域での活動」に現れた結果などを活用し、青少年にとって魅力ある社会参加の機会を充実させることが望まれる。

9 まとめ

調査結果から、家庭、学校、放課後その他様々な生活場面での青少年達の意識や行動が浮かび上がってきた。

その中で、特に目についたこととしては、家族とのコミュニケーションや生活習慣と子どもの心身の状況や悩みとの関係である。

「4」心身の状況や悩みごと」で述べたように家族との会話、就寝時間、朝食の摂取状況、さらには食べ物の好き嫌いが子どもの心身の状況と密接な関係を示している。従来より「親子の対話」や「規則正しい食事、生活リズム」が子どもの成長にとって大切であることが一般に言われてきたが、今回の調査は、改めてそのことを裏付けたものと考えている。

青少年の生活領域は、学校・家庭・地域であるが、その活動領域は広がりを見せてきている。その中で塾やお稽古ごと、部活動など多忙な日々を過ごしている様子がうかがわれ

る。

このような中で、保護者の方々には、子どもの成長に果たす家庭の役割の大切さを改めて認識していただき、温かい家族関係や健康的な生活習慣を培っていただきたいものである。また、家庭というプライベートな空間に行政や教育が関与することの難しさはあるが、このような家庭での教育、子育て等に関する支援を積極的に行う必要がある。

また、例えば、学校や社会で「してはいけない」とされていることへの逸脱を許容することの背景には、性や暴力に関する情報の氾濫などが影響していると思われることなど、調査の結果は様々な面で我々大人社会が抱えている課題や問題を映しだしていると考えられる。

私たち大人はそれぞれの立場で青少年の健全やかな成長を支えていかなければならないが、その際、青少年の問題は社会全体の抱える問題の反映であることを十分に認識し、我々大人自らが姿勢を正し、青少年に向き合っていくことが大切である。

最後に、本調査は「基本調査」であり、特定のテーマに絞った深い掘り下げを行うより、むしろ広範囲の設問により現在の横浜の青少年の姿を浮き彫りにすることに重点を置いたものである。関係局区にあつてはこの「横浜の青少年」の姿を参考に今後の青少年施策の実施に役立てていただきたいと思います。

△市民局青少年企画課担当係長▽

図-10 「結婚したら家事や育児は女性がすべきである」（そう思う+どちらかといえばそう思う）の割合

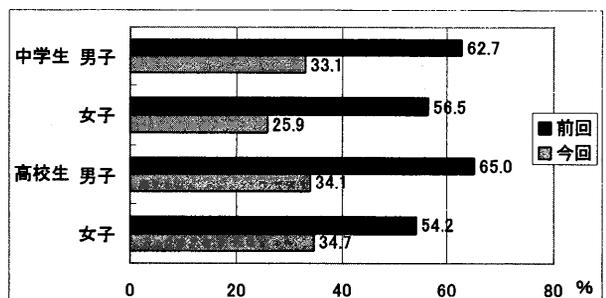


図-11 「女の子は控えめな方がよい」（そう思う+どちらかといえばそう思う）の割合

